

留学生センターの一年

留学生センター 大嶋 真紀

2001・2002	留学生センター	日本語教育部門	留学生指導部門
4月	新入生オリエンテーション (11日)	ひらがなボランティア育成研修 ひらがなpre-session 日本語オリエンテーション(11日) 日本語プレースメント・テスト (11日)	
5月		研修コース市内見学(1日)	多国籍合宿(19&20日)
6月			
7月	第2回国際化シンポジウム (11日)(詳細は本報告書参照)	研修コースオープン・クラス& 第三者評価(第3週) 研修コース修了式(26日)(公開スピーチ・作文集刊行)	第1回留学説明会(12日)
8月			
9月	留学生アンケート調査実施 屋久島実地見学旅行 (26-28日)		鹿児島地域留学生交流推進会議(14日) 留学説明会(台湾 21-25日)
10月	新入生オリエンテーション (12日)	ひらがなボランティア育成研修 ひらがなpre-session 日本語オリエンテーション(12日) 日本語プレースメント・テスト (12日) 研修コース市内見学(31日)	「世界を広げよう」会発足 (12日)(以後毎週金曜日4時~7時開催) カントリー・トーク (KUFSA):パキスタン(20日)テロ直後であり、約60人ぐらいの市民が参加。
11月			第2回留学説明会(9日) インターナショナル・ナイト(KUFSA)(22日) 留学派遣選考会(28日)
12月	第3回国際化シンポジウム (13日)(詳細は本報告書参照) 九州地区留学生センター長・センター教官会議(21-22日)(詳細については付記1を参照のこと)	研修コース:スピーチウィーク (17-21日)	カントリー・トーク(KUFSA):メキシコ(8日) 国際交流会館チューター選考(26日)

1月			鹿児島地域留学生交流推進会議（28日）
2月	鹿児島大学運営諮問会議（15日）：2001年9月に実施した留学生アンケート調査の結果について報告。詳細については付記2を参照のこと。	研修コース修了式（26日）（公開スピーチ・作文集刊行）	カントリー・トーク（KUFSA）：バングラデッシュ（23日）
3月	京都実地見学旅行（25-27日）		

付記1

[九州地区留学生センター長・センター教官会議について]

12月21日、22日の両日、九州地区の留学生センター長・センター教官を招聘し、会議を行った。参加者は各センター長6名、センター教官13名他関係者が一堂に会し、留学生センターの抱える諸問題について終日熱心な議論を行った。議題は以下の通りである。

- センター長会議
- 1 留学生センター教官による卒論・修論指導の可能性について
 - 2 留学生専門教育教官との連携について
 - 3 留学生センターの単位認定について
- センター教官会議
- 1 予備教育をめぐる諸問題について
 - 2 全学向け日本語教育の諸問題について
 - 3 留学生指導をめぐって

付記2

[留学生アンケート調査結果について]

2月15日に開催された鹿児島大学運営諮問会議にて、昨年9月に実施した留学生アンケート調査の結果について報告を行った。以下に掲げるのはその際、配布した冊子『鹿児島大学留学生アンケート調査報告書』の概要である。報告はこの概要に基づき、口頭発表したものである。

鹿児島大学留学生アンケート調査結果の概要

主な調査内容	調査結果	改善すべき点
B-1 鹿児島大学を選んだ理由	全体としては地域や大学への肯定的評価により選択。	さらに一層魅力ある大学、魅力ある地域をめざす。
B-2 留学前の情報提供について	調査時点の留学生には鹿児島での生活や日本語学習についての情報提供が不足	平成13年4月からは留学生センターホームページを開設、また留学生ハンドブックなども配布をはじめている。
B-3 留学目的	約80%が学位取得と回答。 遊学者が少なく良好な状態。	
C-1, 2 自分の語学力	日本語能力：学部生の自己評価が総じて高い。院生は読み書きの能力が劣る。 英語能力：博士課程が高い評価。学部生は低い。	院生の日本語能力については検討が必要。(実態は実験等との競合があり時間不足) 学部生の英語能力については教授法も含め、対応が必要。
C-3 日本語コースへの参加度	日本語補講初級を約5割の学生が受講。	常に受講増を促すが、学部の理解、単位取得、必修化などの対応も必要。
C-4, 5 日本語クラスへの満足度	約6割の学生が満足と回答。	日本語クラスについての個別の要望(技能別・レベル別クラス増、さらにキャンパスごとの対応、施設、少人数化など)にできるだけ答えていく。
C-6 日本語の捉え方	日本語をもっと勉強したいが時間がないとする回答が多数。	
D-1 学習・研究への満足度	肯定的回答が多数。	
D-2 授業等について誰が補助者か	指導教官、日本人学生という回答が7割近い。	チューターという回答が少ないのが問題である。整備が必要。
D-3 勉学上、何が不足しているか。	日本語能力不足・専門書・研究資料不足がそれぞれ2割。 英語による講義、資料、教科書などへの要望も目につく。	日本語能力を強化する一方で、英語による研究環境の充実も必要である。
D-4 チューターについて	チューター制度があまり機能していないという回答が半数以上。	チューター制度の改善が必要である。
D-5 日本人学生との交流について	勉学や行事等ではかなりの交流があるが、私的な面では交流の程度が低い。(分析者は意識の低さというより、双方多忙なためと記述している)	日本人学生との接触の機会を増やすなどの努力(多国籍合宿、世界を広げよう会)をさらに発展させる必要がある。
D-6 日本人学生の印象	総じて肯定的だが、強い肯定ではない。差別的と答える学生も3割はいる。4割はまったく問題ないと回答している。	それほど高い比率とはいえないにしろ、日本人学生の意識改革は引き続き、異文化理解教育等で行っていく必要がある。

E - 1, 2 指導教官の選択、来日までの関係	人を介してが5割、論文やインターネットによるが2割強、文部省決定は11%にとどまる。来日までにあまりやりとりがなかったと回答した者が約四分の一。	今後はますます開かれた大学として、インターネット等で学生の側から選ばれ、また受け入れが決まった段階からはさらに密接な関係を構築していく必要があるだろう。
E - 3 指導教官との使用言語	日英語併用が一般的だが、日常的な事柄では日本語のウェイトが高く、英語使用が5割止まり、専門分野については日本語8割、英語7割と英語使用の割合が高くなっている。それ以外の言語はあまり使用していない模様。	
E - 4 指導教官に対する印象	全体に極めて肯定的。指導教官は総じて留学生の問題を理解しており、良好な信頼関係にあると読める。唯一回答率が3割強だったのは留学生を日本人学生より優遇しているとする回答であった。	指導教官が留学生を特別扱いしているとして日本人学生が被害感を抱くなら問題であるが、現状ではそこまで深刻であるかどうかは不明。日本人学生の側の一般的なうけとめ方を知ることも意義があるかもしれない。
F - 1, 2, 3, 4 奨学金の受給、収入支出について	回答者中、奨学金なしの者が約3割。あとは奨学金の種類により、不足分をアルバイトで補っている模様。研究費の余裕がない者や、食費を切り詰める者なども少なからずいることが窺われる。	奨学金の可能性、研究費の援助などについて引き続き検討する必要がある。
F - 5, 6 住宅への満足度	国際交流会館への満足度は高い。民間のアパートについては、家賃、部屋の狭さなどに不満の声が強い。	アパート等の一括借り上げ、家賃補助制度などの国レベルでの検討とともに、外国人差別などを軽減するための地域ぐるみの取り組みが必要であろう。
F - 7, 8 アルバイトについて	アルバイト従事者は回答中約5割。店員・サービス関係が21名と多い。奨学金の額が少ないと時間数が増える。14時間以上の従事者16名、無記入も考慮すると法定の28時間限度までアルバイトに依存している学生も少数ながらいることが窺われる。	学業を妨げない、良質のアルバイトを、日本語その他で多少ハンディのある留学生に紹介するなどの援助活動が必要であろう。
F - 9, 10 鹿児島での生活への満足度	ほとんどの留学生が一応満足していると認められる。不満だという回答の原因については、経済的・物質的な理由によるものが多く、風俗・習慣にちがいがこれに続くが少数に留まる。	上記のアルバイト、奨学金、住宅などの物質的・経済的環境の改善がもっとも期待されていると考えられる。

<p>F-11, 12 何に困ったり、困ったとき、だれに相談するか</p>	<p>生活苦、友人関係、習慣差などに二桁の回答があるが、あまり困っていないという回答も35名と少なくない。相談相手は指導教官と自国の先輩などが抜きん出ているが、様々な日本人が手をさしのべていることも窺われる。</p>	<p>問題の種類に応じて、様々な領域の相談相手が控えているという状態が望ましい。また相談できる人や場所について、十分な情報を提供する必要もある。</p>
<p>G-1, 2, 3, 4 地域との交流について</p>	<p>4割近くが多くの交流経験があると回答。交流内容もホームステイ、旅行、企業見学など多岐にわたっている。経験者は満足度が高い。未経験者も意欲は高く、アルバイトに追われず、教官の理解があれば参加したいとしている。</p>	<p>地域との交流により、日本社会の多様な側面を知ることは留学体験をいっそう内容豊かなものとする可能性をはらんでいる。引き続き、一層の機会提供、情報提供の努力が必要であろう。</p>
<p>H 総合評価について</p>	<p>7割強の留学生が鹿児島と鹿児島大学への高い評価を表明している。しかし平均以下の評価も2割強はいる。</p>	<p>物質的条件整備、研究指導の充実、心理面での丁寧な対応を三本の柱として展開していけば、留学生による地域と大学への評価は一層高まると思われる。</p>